

島田妙子さん新聞記事③

DV夫は泣いた「母は男をつくり家を出て行った。裏切られた」、執着と暴力の深淵ここに

(産経新聞 2014. 6. 9)

「わたしの講演に、あなたの旦那を連れてきて」

大阪の映像制作会社社長で兵庫県児童虐待等対応専門アドバイザーの島田妙子（42）が、そう提案した相手は、ドメスティック・バイオレンス（DV）を受けていた20歳代の女性だった。なぜ、そんな気持ちになったのかは判然としない。「全員を助けることなどできない」と自認し、講演することで虐待廃絶のきっかけづくりをし、すぐに去っていく「月光仮面」を自称する妙子にしては珍しいことだった。

講演後、女性の夫に会った。開口一番、「おまえナニサマや。他人の家庭に首を突っ込んで」。妻と同年代の若い夫は目を吊り上げ、妙子にこう怒りをぶつけてきた。いきりたつ夫に、妙子は「今度、友達として酒飲まへん？」。後日、居酒屋で約3時間、夫の人生をとことん聞いた。

話によると、夫の父親は酒乱で、母親に暴力をふるっていた。母親はじっと耐えていたが、結局離婚。「これで安心して生活できる。オレがおかあちゃん支えたる」と思ったときに、母親は男をつくり家を出て行った。「裏切られた」と感じた。

夫は途中から、子供のように泣きながら人生を語り、裏切られた思いの反動が妻への強い束縛や、やきもちの延長線上にDVがあることを打ち明け、悔いた。話すことで心はときほぐされていったようだった。

「人はゼツタイいつか死ぬ。生き残る人などいない。死ぬときに持って行けるのは、自分がどう生きたか、人にどう接したかやよ。大切なのは愛と信頼。自分しか自分の人生決められへんしね」

妙子が語った人生観は、ともに虐待を耐え抜き「小さなおとうさん」とも思い慕ってきた次兄が死の床で島田さんに語った言葉。妙子の言葉に、夫は泣きじゃくりながらうなづくだけだった。

《虐待の日々が終わり、妙子は養護施設に入った。継母と離婚した実父は妙子の次兄（小兄（しょうにい））と2人で暮らすようになった。そんなある日、妙子は小兄に会いたくて施設を抜け出し、2人が住む家を訪ねた。小兄にいざなわれて家に入ると、父は「施設に電話しとかな。心配してはるわ」。虐待が始まる前のやさしい父だった。そして「ほんま悪かった。ほんま、すまんかった」とわびた。妙子は「昔のおとうちゃんが戻ってきた。鬼が消えた」と思った。しかし、父はその翌年自殺を図り、一命はとりとめたものの、次の年に死んだ》

講演にはさまざまな人が来る。妙子に反発を抱きながら仕方なく参加する人だっているのだ。民生委員を対象にした平成23年の兵庫県での講演ではこんなことがあった。

「最初から不機嫌な顔でずっとわたしをにらんでいた。身なりの立派な高齢の男性でした」

やりにくさを感じながら話し進めるうち、その男性の表情が変わってきた。虐待されて死にそうになったこと、実父が自殺する前に電話してきたこと、小兄の臨終の話…。「鬼になっていく親を子供は見たくない。大人の心が元気なら、子供も元気なんです」

終わってから男性の妻が駆け寄ってきた。「夫が感動して泣いていた。『だれのおかげで食べられているのか』。そんなことを言う保守的な考え方の夫が…。きょうの話を聞いて『オレはあすからやさしく生きる』。そう言ったんよ」